することが出来ること。

近頃流行りの言葉では「**ちむどんどんする❣**」ですね。

変わる薬局

読売の長寿コラムの一つ「**医療ルネサンス**」。5月31日から5回に渡って患者に寄り添う薬局の変貌ぶりが掲載されていました。

医薬分業が定着して早四半世紀。医師が処方箋を出し薬局で薬を貰うわけですが、薬を手渡すだけの薬局は患者にとって頼りないものでした。

今、それぞれの患者さんに担当の薬剤師がついて別の診療科でもらう薬も全て管理してもらえるサービスが始まっています。この連載の最後には「**自分に合う特色を選ぶ**」とあり、薬局はどこでも同じではではありません、「認定薬局」の一覧表(WEBサイトで公表を)見て自分に合った薬局を選ぶことが大事だとありました。コンビニでも薬が受け取れるサービスと開始するようですが、薬局としての使命を忘れないでほしいと思います。

ドラゴンへの階段 第㊳回（連載エッセイ版）

「不思議なあたたかい音」

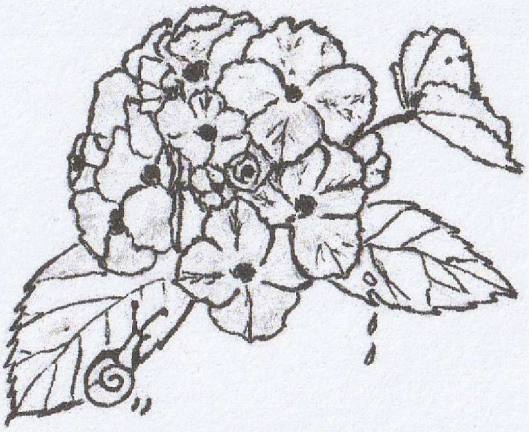
佐藤　洋祐

このところ梅雨入りを果たした空はいつも灰色のぎっしりと重たい雲におおわれ、それを見上げた時に目に入る木々の葉はふんだんな恵みの雨に潤されこれ以上濃くなれないほど緑です。お隣さんの柿の木が咲かせていた花々は今や小さな青い柿の実になり、風に揺れて皆なんとも可愛らしい。我が家の庭に自生する逞しいアジサイの花たちはいつも水滴を花びらにたたえて、私たちが水の季節を過ごしていることを静かにしかし強く語ります。

未だコロナ禍にある世の中ながら少しづつ感染対策規制が緩和され、ライヴ演奏の機会も恐る恐るのように増えつつある今日この頃ですが、そんな仕事の場においてこの年になって感じるようになった変化がありまして、今回のエッセイはそ

身近な方々に囲まれながら等身大の音楽を演奏したい、ということで祖国である日本に帰り活動をはじめ、かれこれ6年ほどになり、おかげ様でこの1月で半世紀を生きたことになったのですが、演奏の最中にこれまで聞こえなかった不思議な「音」が聞こえるのです。

演奏会のはじまりから、その音が鳴ることはありません。聞こえるとしたらそれはたいてい、私、共演しているミュージシャン、お客様、そしてそれらをとりまく空間全体が良くあたたまったな、という頃。私の吹く音、歌う声、共演者の奏でる音、お聴きになる方々の発する和やかな雰囲気、それらの間を満たすように、絶え間なく、波のない静かな湖面下の大量の真水のように、ゆったりと神秘的に鳴り続ける音があるのです。



挿絵　TAKAKO

その音は決してうるさい音ではないですが、私たちの奏でるどんな音よりもたっぷりと聞こえています。奏でられた実際の音はみなその音に優しくやわらかく吸収されていくのです。それはいつでも鳴るわけではなく、運が良ければ聞くことができ、鳴り始めても急に消えてしまい、長時間に渡って続いた感じはこれまでありません。たいていはなにかお店の電話が鳴ったり、外からの新たなお客様があったり、そんなきっかけでぱっと消えてしまいます。その音がその日に現れるかどうか、なんとなく予感があったりします。もちろん、予感がなくても、突然にそれは訪れることもあります。その音が鳴り始めたら、それを聞き続けたい、それに包まれていたいという思いだけで私は演奏を続けます。何も考えることなく、まるで頭の中を、全身を空っぽにしたように。ただただその音が自分という共鳴体によく響いてくれるように、空っぽにしたいのです。

「何を訳のわからないことを！」って言われてしまいそうですね(笑)。私にも何とも表現しにくい感覚なのですが、例えば、皆さんは街のけん騒から離れた深い天然の森に立ち入られた際に、小鳥たちのさえずりをお聞きになりながらも何故か静寂を感じ、また黙って立っているはずの木々や足元に生える草々や苔のじゅうたんから厳かな呼吸音が聞こえるような、そんな感覚を体験されたことはないでしょうか…それに少し似ている、とでも言いましょうか…

その音が鳴ってくれた時は、実際の音を奏でる者も聞く者も、満ち足りた面持ちになっています。演奏による肉体的、精神的な疲れは全く感じません。

それは私たちが通常、耳で聞く音というより、肌で感じる雰囲気のようなもので、私の五感である視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、それらの境目が年と共にはっきりしなくなっているために、実際に奏でる音と混同してしまってのかも知れませんね。それにしても、その「音」はとても心地良く、それに包まれていたいあたたかさに溢れているので、いつもその現れを待ち焦がれるようになっています。

（2022年6月11日筆）

佐藤　洋祐(サトウ　ヨウスケ)
ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞。2015年末より佐倉市在住。2019年よりシンガーとしても活動を開始。